



Title	現代日本語における「自身」の使用実態について
Author(s)	Charoenpit, Natwipa
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2005, 39, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/9662">https://hdl.handle.net/11094/9662</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 現代日本語における「自身」の 使用実態について

チャーロンピット ナッタウイバー

## 1. はじめに

現代日本語の再帰代名詞「自分」についてはこれまでも考査がなされてきているが、「自身」については十分な記述がなされていないように思われる。本稿の目的は、現代小説を資料として、「自身」がどのように使用されているかを記述することである<sup>1)</sup>。

まず、表1のような事実から出発する。ここで、「非単独用法」としているのは、「あなたの自身の考えを聞きたい」「社長自身が決めたことだ」のように、「自身」が人称代名詞や名詞に接続している場合であり、「単独用法」としているのは、「ご自身で決めてください」のように、名詞などに接続せずに用いられている場合である。

表1 非単独用法の「～自身」と単独用法の「自身」の分布

非単独用法の「～自身」		単独用法の「自身」	
地の文	会話文	地の文	会話文
926	504	63	34
1430		97	
合計 1527			

この表から、非単独用法が圧倒的に多いことがわかる。これは「自分」との大きな違いである。「自分」は人称代名詞や名詞に接続することはない。

そこで、まず「自身」の非単独用法について述べ、次に単独用法について、「自分」との違いを述べることにする。

## 2. 非単独用法の「～自身」の場合

非単独用法の「～自身」の特徴を、次の三つの観点から述べる。

- ① 接続する形式のタイプからみた特徴
- ② 格関係からみた特徴
- ③ コンテクストからみた特徴

### 2.1 接続する形式の特徴

基本的に、「自身」が接続するのは、下記のように、<人間>を表す人称代名詞、普通名詞、固有名詞、および「自分」である<sup>2)</sup>。上記の③と関わって、「～自身」は、それが使用されている一文のみを取り出しても、その意味・機能がわからないことが多いため、以下の用例の提示においては、コンテクストがわかるように、できるだけ前後の部分も併せて示すこととする。

- 1) 「今お話ししたようなわけですから、僕は人のアパートに世話になりましたながら、雪祭りを見たら帰ろうと思っていたのです。ただ帰って母親の顔を見たらこっちもおかしくなるので、東京には帰らない方がいいかなとか、そんなふうに思案していました。僕自身は、放浪生活が性に合っていたんですね。」(死者)
- 2) 「私、あなたに甘え過ぎていましたわ。あなたがいなくても一人で大丈夫。ですから、もう私の傍へは来ないようにして下さい。あなた自身のためにも、ご家庭のためにも」(裏切り)
- 3) あの刈谷の表情は、どういう種類のものだったのでしょうか。彼は

初めから、自分の病気をはっきりと知っていたというのです。病人の家族が真実を知っていて、病人自身は知らないというのが普通なのに、私たちの場合は反対でした。(悲しみ)

- 4) 「母親が再婚したの。父は四年前に死んでいて、たぶんこれからあたしにお金がかかることが不安だったんだと思う。母自身、働くのにも疲れてたしね。義父は母より三つばかり年上で、建築の仕事をしているせいか、ごつくて岩のような印象の男だった。」(めまい)
- 5) 「木原さん自身が、幻の作品を探したことはないんですか?」「私はありません。もちろん、見つかったら、ともかく見たいと思っていました。ホンモノなら手に入れたいともね」(箱根)
- 6) わたしは母から愛されてないことに、コンプレックスを感じようになっていた。そしてまた、自分自身も母を愛していないことを認識していた。わたしは母も武則も、だれも愛していなかった。私はひとを愛することを知らない子どもとして成長してしまったのだ。  
(愛)

次のように、人間以外の名詞に接続している例もあったが、用例数は少なかった。このような場合は、「自体」を使用するのが普通であろう。「自身」を使用することによって、擬人化という機能が生じているかどうかについての考察は今後を期したい。

- 7) ただ、奇妙なことに、家の建っている部分は、すこしも高くならないのだ。道だけが高くなって、部落自身は、いつまでも平坦なのだ。いや、道だけでなく、建物と建物のあいだの境の部分も、道と同じように高くなっていた。(砂)
- 8) 僕の悩みは一瞬にしてドライアイスになり、それ自身の冷たさに耐えられなくなって、木端微塵に碎けた。(夢)

なお、次のように、名詞や人称代名詞に「ご自身」が接続する場合もある。

9) 「野村社長説が出てるそうですが、まさか、その震源地が野村専務  
ご自身ということはないでしょうね」

野村はいきなり切り込まれて、鼻白んだ。(あざやか)

上に述べた「～自身」の特徴は、「チャンス自体が少ない」「言語一般を考える」「若者全体に広がっている」「教員一同」「私個人」のような場合と、二単語で一つの文の部分に用いられるという点で共通していると思われる。この場合の二つの単語間の関係は、「われわれ人間」「元総理大臣岸信介」のような、いわゆる「同格」の場合とは違っている。この点についての考察は今後の課題としたい。

## 2.2 格関係の特徴

まず、次頁の表2を見られたい。参考のために、とりたて形式の場合も一緒に掲載しておくことにする。

表2からわかる最も興味深い点は、小説の地の文においても<ゼロ格>の使用が多いことである。これは通常の名詞の場合と大きく異なっている点である。まず、この点を具体的に述べ、次に<デ格>の場合について触ることにする。

### 2.2.1 <ゼロ格>の使用実態

鈴木(1972)では、<ゼロ格(はだか格)>について、次のようなことが指摘されている。(詳しくは、『日本語文法・形態論』217~223頁を参照されたい。)

① <ゼロ格(はだか格)>は、名詞の基本的な格である。

表2 非単独用法「～自身」がとる&lt;格&gt;と&lt;とりたて&gt;の形の量的分布

		地の文	会話文	合計
格の形 <sup>3)</sup>	ゼロ格	169	115	284
	ガ格	210	147	357
	ヲ格	4	3	7
	ニ格	26	13	39
	デ格	13	9	22
	ト格	2	-	2
	カラ格	4	2	6
	マデ格	6	-	6
とりたての形	ハ	134	69	203
	モ	108	52	160
	その他の とりたての形	4	4	8
その他 <sup>4)</sup>		246	90	336
合 計		926	504	1430

- ② 一般の名詞では、他の単語に対する積極的な関係を示さず、「中村君、いっしょにつりにいかないか」のように、文のなかで、提示やよびかけの独立語になる。
- ③ 数量や程度を示す名詞の<ゼロ格>は、「彼らは大部分死んでかえってきた」のように、量や程度を限定する。
- ④ 「きょう、きのう、あした、現在、今年、来月」のような、話し手の発話時を基準にする時間名詞は、<ゼロ格>で状況語として使用される。
- ⑤ 会話文などで、「ぼく、行きません」「酒、飲んだ」のように、主語

や対象語として使用される。

上記のうち、⑤の特徴は会話文に限ってのことである。しかし、「～自身」の場合は、次のように、会話文の場合のみならず、小説の地の文であっても、<ゼロ格>が普通に使用されている。

まず、地の文の場合の、下記の例10)～14)を見られたい。この場合、「自身」がないと、非文法的あるいは不適切な文となってしまう。

例12) 悅子自身、日記をつける習慣はない。

\*悦子、日記をつける習慣はない。

10) 警部さんの言葉が、警部さんらしくもなくしみじみとしていたからだろうか。僕は思わず、なんの深い考えもなく、頭に浮かんだことをパッと口に出していた。「捜査のほう、どうですか？警部さん、僕にもなにか手伝えることないですか？何かやらせてもらえないですか？」警部さんは目をむいて僕を見おろした。僕自身、言ってしまってから自分でびっくりしていた。いったい何を言い出したんだ、オレは。(夢)

11) 「今日買った分をいれて、合計でどのくらいになりましたか」

「十四万株だな」

「じゃ、まだ一割にならないんですか」

「一割だと三割だとかいうことには、あまりこだわらない」

そうは言ったものの、美川自身、一割の二十二万株は計算していた。

(買占め)

12) ゆかりを寝かしつけてから、悦子は、今度はじっくりと時間をかけて、みさおの日記を読み返してみた。八月七日から始めて、日付の若い方へ戻っていく。

あの「レベル」という言葉が出てくる部分については、特に神経を

尖らせて見なおしてみたのだが、昼間検討してみたとき以上の発見はなかった。「真行寺さん×」についても同じだ。別の日付のところに、ハートのマークはしるされているようなこともないし、悦子にハートのマークをつけることについての説明ららしいことも書いていない。

悦子自身、日記をつける習慣はない。(レベル)

13) 沢入は、黒い服の女からの返事を、初雪を見るまで待ってみると確

かに言った。刑事はそう憶えていた。今、初雪は降ってしまった。

女からの電話はなかったのであろう。だがもともと望みはなかったのだ。彼自身それは知っていたはずである。(死者)

14) 平田敬は、その手紙をそっと封筒へ戻した。

もう何度も読んで、何が書かれているか分かっているのに、またくり返し読んだ。—今、充子は風呂に入っている。

そろそろ出て来るころで、平田は、あえて手紙をゆっくりとしまつて妻がそれを見てしまうことを期待していたかのようだった。自分自身、気持がよく分からない。(明日)

次の例15)と16)は会話文の場合であるが、「自身」がないと、コンテクスト上、不適切になると思われる。例15)の場合、「東亜電力の佐竹社長」との対比のなかで「私」が捉えられており、その対比的機能を「～自身」が担っているようである。

15) 宮本は、矢野を応接室に案内した。

「ご心配おかげして申しわけありませんが、私は、告別式が終わつてから新体制を決めたいと考えています」

「どうしてかね」

「私自身まだ考えがまとまませんし、東亜電産の佐竹社長は、

私を会長にして、野村専務を社長にさせたい意向のようです」(あざやか)

- 16) 「夜道です。急いで家に帰りたいのだろうと思いました。若い娘さんでしたからね。あの交差点の、タクシーが走って来た側には、シートをかけた建設中のマンションがありました。非常に見通しが悪かった。私自身、事故の直前まで、走ってくるタクシーが見えませんでした。」(魔術)

### 2.2.2 <デ格>の意味と機能

「～自分で」は、一般的な名詞の<デ格>と違って、<動作主体>的な意味をもっており、<ガ格>に言い換えることができる。一般的な名詞の場合、「太郎で解決した」とは言えず、「太郎が解決した」と言わなければならぬが、「自身」を伴っている場合、「太郎自身で解決した」「太郎自身が解決した」は、ともに言えるのである<sup>5)</sup>。以下の例17)、18)でも、「自身」がないと非文法的になる。

- 17) わたしは議論することを止めた。ニューヨークに行ってから、その気になれば私自身で解決できることだと気づいたからである。指導員を殺した相手を見付けても、三島とかいう男に下らぬ野試合をさせなければいいのだ。だが、大内哲治がそんなわたしの考えを見透かしたようにこう言った。(闇の狼)

- 18) 「お止めしたんですけど」と、万里子が小声で言うと、  
 「いいさ。社長ご自身で決められたことだ。我々がどうこうするわけにはいかない」武藤は、慰めるように言って、「ともかく僕がそばにいて、無理なきらないように気を付けるよ」(明日)

なお、この特徴は、「自分で」の場合と共通している。次の「自分で」は「自分が」に言い換えることができる。

- 19) 貝原好子が帰ると、悦子はぐったりと疲れていた。自分のために濃いコーヒーを入れて、キッチンの椅子に腰を降ろした。「ネバーランド」での仕事について、そろそろ半年になる。だが、こんなたぐいのトラブルは初めてだ。どうすることがいちばん適切なのだろうと考えながら、ひどく心細くなっていた。もともと、今の仕事は、自分で希望して始めたものではない。(略)(レベル)
- 20) ナロクのガソリンスタンドからマサイ・マラまでは二時間。ナイロビまで戻るのと変わらない。いや、かえって保護区の一流ロッジのほうが、観光客の要求にこたえ得るクラスの医者を置いているのではないか。そう判断して、浩司はジムニーをそこに残し、自分の車に彼女を乗せて運んできたのだ。それにしても、どうしてこんなところにこの女がいるんだろう、と浩司は思った。それも自分で運転までしているなんて、いったい何があったというのだろう？(野生)

### 2.3 コンテクストの特徴

非単独用法の「～自身」は、次のように、会話文であれ地の文であれ、その人物が最初に提示される場合ではなく、二度目以降に使用される。実際、会話で「あのね、昨日、梅田で偶然小学校時代の同級生に会ったのよ」とは言ても、「あのね、昨日、梅田で偶然小学校時代の同級生自身に会ったのよ」とは言えない。しかし「昨日、梅田で小学校時代の同級生を見たのよ。彼女自身は気づかなかったけど」となら言える。以下の例21)の場合でも、最初の「恭介」と二度目の「恭介自身」とを入れ替えると、不適切になってしまうであろう。

- 21) 「うん、少なくとも、そういう可能性は考えるだろうな」と、恭介は言った。萩野が殺された事件については、恭介自身もそれと同じようなことを考えたのだ。(おとな)
- 22) 宮本は手でソファを示し、席を起って、佐藤の前に腰をおろした。  
「K銀行の矢野会長との面会は、今日だったね」  
「ええ。午後一時半ということになっています」  
佐藤はいぶかしげにこたえた。  
宮本は、けさ佐藤からそのことで念を押されたばかりだったのである。  
宮本自身も話しながらそのことに気づいていたから、話のつじつまを合わせるために、愚にもつかぬことを質問しなければならなかつた。(あざやか)
- 23) 「犯人がおもわぬ大金の忘れ物に悪心を起こしたとすると、被害者はなぜ深沢あたりまで車を繰っていたのかね」  
副部長の署長が質問した。  
「二つの可能性が考えられます。一つは犯人と被害者の間で忘れ物を分け合おうという了解がついた場合、二つ目は、犯人が途中で被害者を殺害して犯人自身が現場まで車を運転した可能性です」(悪)

### 3. 単独用法の「自身」の場合

ここでは、①「自身」と「自分」の共通点と相違点、②「自身」の単独用法と非単独用法の違いについて述べる。

まず、単独用法の「自身」は文体差を除けば、文法的には「自分」と同じである。次の場合の「自身」は「自分」に言い換えることができる。ただし、最後の例26)では、同じ文中に「自分」が使用されているため、重複をさけて、「自身」が使用されているのであろう。両形式は、「自身の問題

だったが、江田島は、自分で二人に解説をしてみせた」のように、相互に入れ替えることが可能である。

- 24) 馬鹿と叫んで、今日子にタオルを投げつけた。彼女は、笑いながら床に倒れ込んだ。いつのまにか、私と一浩の間には、泣かずすむ距離が置かれていたのだった。悲しめない。惜しめない。嫌いになれない。一浩は、いつのまにか、自身をそういう存在に仕立てあげて、私の前にいた。ずるいけど、あっぱれ。結婚生活は、人に知恵を付けるのか。だとしたら、私にも何かが授けられていると信じたい。(A2Z)

- 25) ともかく、白川は日本を発った。

バンダール・スリ・ブガワンに入る、そこでかすかな一本の糸を掴んで、サラワクの首都クチン市によすがを求めた。さらに糸を辿って、シブに向い、危地を潜り抜けながら、レシャン川を遡ってきた。目的を捨てなかつた自身に、白川は感謝した。(昏き)

- 26) 「邪心のない単なるエアライン・日空の社員、ま、管理職の一人として言わせてもらえば、今まで妹尾社長は名誉会長に、副社長に推す人材がいないって報告していましたね。だから後継候補も決められないって。これは要するにすべて江田島室長の条件の問題でしょ」

岡は低く言った。

「取締役経験が四年しかないこと、二年後でもやっと五十六歳だっていう二点だろう」

わかりきっていることだったから、自分の問題だったが、江田島は、自身で二人に解説をしてみせた。(三人)

ただし、既に述べたように、<ゼロ格>の場合には、言い換えは不可能

である。そして、次の例27)の場合、「あなた御自身、そんなものを信じない方でしょう」と言い換えてよい。

- 27) 「どうして、自分が名探偵だと分かるのか——こう、おっしゃりたいのですか」

「はい、だって、名探偵の偏差値なんてないでしょうし、大学の名探偵学部を優秀な成績でお出になつた——なんてこともありませんよね」

「そんなものがあったら、信じますか？あなたは、御自身、そんなものを信じない方でしょう」(サヨナラ)

次に、単独用法の「自身」は、「自分」と同様に、一文内で使用される。しかし、非単独用法の「～自身」は、一文内ではなく、文を超えて使用することが可能である。この点で、単独用法と非単独用法は異なっている。

(\*は、非文法的であることを示す。)⑥)

- ・太郎は自分の考えを述べた。
- 太郎は自身の考え方を述べた。
- ・\*梅田で昔の恋人を見かけた。自身(自分)は気づかなかつたけど。  
梅田で昔の恋人を見かけた。彼女自身は気づかなかつたけど。
- ・\*梅田でマリ子を見かけた。自身(自分)は気づかなかつたけど。  
梅田でマリ子を見かけた。マリ子自身は気づかなかつたけど。

以上のこととは、非単独用法の「～自身」は、人称代名詞や名詞に接続することによって、文を超えたレベルでの、人物の同定を可能にするという機能を果たしているように思われる。この点については、今後を期したい。

#### 4. おわりに

以上をまとめると、次のようになる。

- ① 「自分」は単独で使用されるが、「自身」の方は、<非単独用法>が基本である。
- ② 「自身」は、「自分」と同様に、基本的に<人間>に対して使用される。

<非単独用法>という点で「～自身」と共通しつつ、人間以外の<もの・こと>に対して使用されるのは、「～自体」である。(なお、「自体」には単独用法はない。) 「～自身」と「～自体」は、どちらも<非単独用法>である点では共通しているが、<人間>か<もの・こと>かで対立しているのである。今後はこの点を視野に入れて考察を深めていきたい。また、「自身」に対応する和語として「みずから」がある。漢語「自身」と和語「みずから」の比較対照も今後の課題である。

筆者が現代日本語の「自身」や「自分」という形式に興味をもったのは、母語であるタイ語との比較対照的視点からであった。タイ語では、日本語に訳すと「父は父自身を一番愛している」というような言い方が普通にできるのに対して、日本語ではそうは言えず、「父は自分自身を一番愛している」と言わなければならない。このような違いに気づいたことがきっかけで、まずは、現代日本語の「自身」について「自分」と比較しながら分析することが、今後のタイにおける日本語教育にとって大切だと考えた。日本語における使用実態をきちんと分析しないままに、日本語とタイ語を比較対照しても、不明確なもの同士を比較することになってしまふと思われたからである。今後は、日本語の使用実態をきちんと把握しつつ、タイ語との比較対照も行っていきたいと考えている。

#### 注

- 1) 井上(1976)では、「自分」「自己」、および名詞に「自身」または「自体」がついた形式を再帰名詞と総称し、「自分」「自己」「自身」「自体」を再帰形式と呼んでいる。「自身」「自体」は、広く固有名詞、普通名詞、代

名詞と結合して再帰名詞を作ると指摘されている。

鈴木一彦ほか編(1984)では、「自身」は「自分」「自己」「自体」と同様に「反照代名詞」・「反射代名詞」として扱われている。

鈴木重幸(1972)では、「自身」そのものについてではないが、次の例を挙げながら、「自体」「みずから」などのようなものは、形式上、第二種のとりたてと似ている部分があると指摘されている。

#### 第二種のとりたてのくっつきの用法:

- ① 第一種のとりたてのくっつきと同様の位置をしめる。
- ② はだかの名詞(語幹)にじかにくついて、名詞と第二種のとりたてのくっつき全体がはだかの名詞(語幹)と同様に、その後に次のようなものが自由につく。
  - ・格のくっつき(連体的なものもふくむ)
  - ・第一種のとりたてのくっつき
  - ・ならべのくっつき「と」「や」「か」など
  - ・むすびのくっつき「だ」「です」

第二種のとりたてのくっつきのこうした用法は、ある種の名詞のつきのような用法とてている。

こうした 考え 自体が……

政府 みずからが……」

- 2) また、非単独用法の「～自身」が次のように使用される場合もある。
  - ・だから、部費集めやその管理も部員たち自身の手で行っている。(死者)
  - ・「(略)。その意味では、彼女たち自身の自己保全本能に彼女たちをころさせたことになるかな」(魔術)
- 3) <へ格>の「～自身」の例は、今回確認されなかった。鈴木(1972)では、<へ格>は主として「ゆくさき」を表すが、<へ格>の用法はかなりせまく、<ニ格>の用法の一部に相当する意味を表すにすぎないとされている。また、まれに、次の例のように相手を表す対象語として、<ニ格>の代わりに使われることがあると指摘されている。
  - ・きみたちへいいものをあげようか。

今回<ニ格>の「～自身」の用例は確認されたが、<へ格>の「～自身」は確認されなかったのは、この、<へ格>の用法のせまさによるものと思われる。
- 4) <ノ格>が243例、<後置詞>の例も93例あったが、今回は、考察の対

象外とした。以下、それぞれの具体例を挙げる。

<ノ格>の場合

- ・(略)、実は彼自身の個人生活のなかで、夫に捨てられながら色々な苦しみに耐えて彼を育ててくれた母のことを思い出していた。  
(深い)

<後置詞>の場合

- ・前の二度の自殺がいかなるものであれ、三度目のそれは嘉津彦自身にとって、すでに賭けでもなければ演技でもない、唯約束の忠実な履行であった。(太陽)

- 5) ただし、次のような場合の<テ格>は、<動作主体>を表しているが、<ガ格>に置きかえられない。また「僕自身が比較したんだ」とほぼ同じ意味・機能になるようである。この点については更に考察する必要がある。
  - ・「俺が自分で比較したんだ。間違いようがない。週刊誌の発行日にもごまかしなんかない」(レベル)
- 6) ただし、既に指摘されているように、次のような場合もあって、「自身」「自分」が、文を超えて使用される場合もある。
  - ・光子は迷わずそう答えた。声には自身の生に少しも恥じらうことのない艶があった。(サヨナラ)
  - ・木口は、そばに、もう一人の自分が歩いているのを見たことさえある。もう一人のその自分が、ともすると体の崩れそうになる木口を叱りつける。(深い)

### 用例出典

\* 本文中は略称（下線部）で示す。

- 阿木慎太郎 (1990)『闇の狼』祥伝社、辻仁成 (2002)『サヨナライツカ』幻冬舎文庫、宮部みゆき (1999)『夢にも思わない』角川文庫、唯川恵 (2002)『めまい』集英社文庫、赤川次郎 (2000)『明日に手紙を』中公文庫、阿部公房 (1962)『砂の女』新潮文庫、門田春明 (1994)『裏切りの条件』徳間文庫、佐野洋 (1984)『おとなのにおい』集英社文庫、芝木好子 (1990)『群青の湖』講談社文庫、島田荘司 (1992)『死者が飲む水』講談社文庫、清水一行 (1989)『買占め』光文社文庫、清水一行 (1998)『三人の賢者』徳間文庫、下田治美 (1992)『愛を乞うひと』角川文庫、曾野綾子 (1986)『この悲しみの世に』講談社文庫、鈴木光司 (1991)『リング』角川文庫、高杉良 (1979)『あざやかな退任』集英社文庫、西村京太郎 (2000)『箱根 愛

と死のラビリンス』新潮文庫、西村寿行（1987）『昏き日輪』光文社文庫、  
宮部みゆき（1989）『魔術はささやく』新潮文庫、村山由佳（1998）『野生の風』集英社文庫、森村誠一（1994）『悪の戴冠式』ケイブンシャ文庫、山田詠美（1999）『A2Z』講談社文庫

### 参考文献

- 井上和子（1976）『变形文法と日本語（下）』大修館書店  
 久野暉（1973）「再帰代名詞『自分』」『日本文法研究』大修館書店  
 言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房  
 澤田治美（1993）『視点と主觀性——日英語助動詞の分析——』ひつじ書房  
 鈴木一彦ほか編（1984）『研究資料日本文法 第1巻 品詞論・体言編』明治書院  
 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房  
 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版  
 村崎恭子（1975）「『自分』という語について」『日本語学校論集2』  
 Quirk, Randolph and Greenbaum, Sidney (1973) *A University Grammar of English*, English Language Book Society and Longman Group Limited.  
 (大学院前期課程修了生)

## SUMMARY

### The Usage of “*jishin*” in Modern Japanese

Natwipa CHAROENPIT

In modern Japanese, “*jishin*” has two usages; one is “*hi-tandoku-yoho*” [the non-single usage] which is used with noun or personal pronoun at the front of “*jishin*”, and the other is “*tandoku-yoho*” [the single usage] that “*jishin*” is not preceded by noun.

Although there have been a lot of studies with a focus on “*jibun*” as a reflexive pronoun, it seems that the studies on “*jishin*” are not sufficient. Therefore in this paper, I observed the two usages of “*jishin*” in detail, comparing it with “*jibun*” and “*jitai*”.

As a result, the following facts could be observed.

- (1) “*jishin*” which is used as “*hi-tandoku-yoho*”, appears without a case marker, both in dialogue as well as narrative.
- (2) “*jibun*” is basically used as “*tandoku-yoho*”, but “*jishin*” is basically used as “*hi-tandoku-yoho*”.
- (3) “*jishin*” is basically used for people, like “*jibun*” is.

From above, we know that it is “*hi-tandoku-yoho*” of “*jitai*”, which is used for “*mono & koto*” [things], and that “*jitai*” has no “*tandoku-yoho*”. Though “*jishin*” and “*jitai*” have “*hi-tandoku-yoho*” respectively, they are different from each other whether it is used for people or for “*mono & koto*” [things].

キーワード：自身，非単独用法，単独用法，ゼロ格，コンテクスト